埋匿されていた墓石

重岡のるいざの墓についての考察

羽柴　弘

（一）はじめに

それは宮崎県との境も程近い草深い山里、南海部郡宇目町は重岡の丘の上に、巨大なキリシタンの墓のあることは、今は故人の半田康夫先生が十二三年前紹介され、既に広く世間に知られていて、大分県教育委員会はその調査を行ない、大分県の文化財として「史跡」に指定している。

この墓は「るいざ」と呼ぶ女性キリシタンを葬ったもので、縦百八十糎にも及ぶその長大な伏墓には、死没の年月日、霊名それに見事な日輪十字章まで彫られていて、ちょっと類例を見ないほど壮麗且つ完全な切支丹墓である。

今回大分県地方史が、豊後キリシタンの特集とするに当り、私は何はおいてもこの「るいざ」の墓を書かなくてはと思い、一応既に与えられている文献、資料をもとに、それに重岡渡辺家での聴書や見学の際のメモを参考にし、若干の考察を試みて読者の方々の御批判を仰ぎたいと思うのである。但し学術的な検討は素人の私などには到底出来ない事なので御免を蒙って、気楽な読みもの風にまとめることにした。従って中には根拠のうすい推論や、勝手な臆測がいくつかあろうが、それは御勘弁いただきたい。

（二）今ある墓の姿

私は前後三回ほどこの墓をたずねている。最初は数年前、ある商社が「るいざ」をその売出す銘菓の名前にしようと相談を

かけられ、ともかくもまず実施に見よう――ということで、その店の車で出かけた。

初夏の陽ざしが新緑の山野を埋め、もう麦が色づきかけていた。宇目町の役場に連絡してあったので、千束から御案内の若い人が同行してくれたので好都合、市園河畔の葉桜の並木道をものの三四分車が走ったら宮園という重岡の入口部落、ここで車を下りて爪先上りの山道を二十米ほど登り、渡辺家の墓地を通り、若葉の下陰の小径を更に十米ほど登った低い丘の上に、目指す「るいざの墓」はあった。まことに堂々たるものである。

写真（一）　美しいるいざの墓

表面の十字章及び手前の文字は、写真撮影のため仮りに白墨をほどこしたもの、これはあまりよいことではない、つつしまねばならぬことと後で思った。

写真（二）　松田博士の調査

（向って左から　立川輝信　松田博士　安藤一馬）

第二回は一昨年の秋、すでに霜枯れていたころ、この道の権威松田毅一博士を案内（立川、安藤両氏同行）ここを訪れた。松田先生は多くのキリシタン関係の著書があり、特に南蛮文化研究では第一人者である。私は二三の粗末な研究プリントを差上げ、後述のような地下埋匿の事情などについての見解を申上げたのであったが、先生は大体御支持下さったように覚えている。

第三回は去る七月二十七日、佐伯史談会の定例現地研修を藤河内溪谷から宮崎県北川村にかけて試みたその往路、バスをまずここに寄せた。一行二十名のうちにも初めての会員が多く、私は一応説明役を引受けたが、この素晴らしいキリシタン墓をとりまいて、寸法をはかったり石の質をしらべたり、てんでに細部まで写真にとったり、かなり詳しく研究研討の時をすごした。

ここでちょっとお断りしたいことは、墓石には平仮名で明らかに「るいさ」とある。これは濁点を用いずに書いたもので、本来は「るいざ」というクリスチャンネーム（霊名）であるので、本稿ではすべて「るいざ」と濁って呼ぶことにしている。

この墓については大分県文化財調査報告書第五集（昭和三十二年五月）――以下単に報告書と呼ぶ――には詳細にその形状（長さ、巾、高さ）石質、紋様、霊名が正確に示されているので、同じことを掲げるのを止すが、調査の筆者半田先生は、

「ルイサの墓が、十字章、霊名、歿年月日等の整った県下第一の巨大な切支丹墓」

と、この墓のすぐれた立派なものであることを強調している。

大分県下にはキリシタン墓はかなり多い。その主なものをあげて見ると、

由布院川上のキリシタン墓群

臼杵市掻懐（かきだき）のキリシタン墓

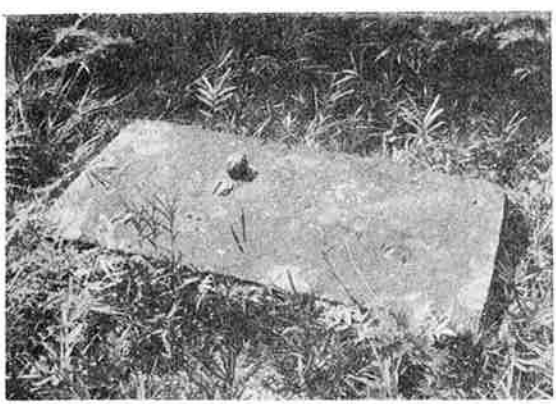
直入町下河原のキリシタン墓碑

野津町の常珎の墓

等が考えられるが、その外にも独得の斗桝墓や伏墓が各地にある。前記の主なものには、いずれも十字章（クルス）は示されているが、そのキリシタンの名前や、昇天年月日まで揃っているのは、この「るいざの墓」だけである。しかも長大優美、畳一枚の広さに近い凝灰岩の墓石は石質もよいし、細工もていねいで特に頭部に当る上面に施されてある日輪十字章の美しい線の刻み、又手前に彫られた「るいさ」の名前とはさんで「元和五年」「正月廿二日」とつつましやかに書かれた文字、一点の非の打ちどころのない立派なもので、敢えて寡聞をかえりみず言えば、県下は勿論豊後と並ぶキリシタンの地長崎県下のものに比べても、これに比敵するものがあるかどうか、疑わしいと思う。

写真（三）

写真（五）　夏草の中に



（お断り）　上掲写真はお盆前であったのでこんな様子であったが、恐らく今はきれいにされているであろう。右手前に花筒が見える、花はさゝれてなかったが嬉しかった。

それはともかく、宇目町重岡の渡辺家の累代墓地に程近い丘の上、縦四米位、横三米深さが一米ほどの堀りくぼめられたような窪地に、数年前植えこまれたばかりの檜の幼樹にかこまれ、小さな笹や夏草に半ば埋もるように墓はある。二米に近い巨きな伏墓は、堂々たる重量感を示しつつ、ムンムンする草いきれの中に「るいざの墓」はある。

（三）切支丹るいざの昇天

この墓の主人公は、るいざと呼ぶ女性、岡藩家中の士渡部某の娘、縁あって「宇目郷割元役」という家柄、この重岡の渡辺善左衛門の妻となり、一男一女の母となったが、不幸三十才になるならない頃死没したようであると半田先生は報告書に書かれている。私はこれをそのままいただき、尚想像を加えるならば、その切支丹入信は既に信者の多かった岡城下竹田に於いてであったろうし、渡辺家に嫁入った後もその信奉はつづけられ、これをよほどすぐれた神父が引つづいて導き励ましていたであろうと思う。又るいざ自身も渡辺家のよき嫁となり、よく夫に仕え舅姑に仕え、二人の子供を愛育し、村の人達とも誠実をもって交わり、その切支丹信徒としての日常の行状はみんなの敬慕するところとなっていたのではあるまいか。

ところがそのるいざはふとした病気か何かで死んだ。切支丹の言葉で言えばデウス（天帝）に召されたのである。渡辺一家の悲しみは言うまでもなく、村人達まで挙っての哀悼のうちに、切支丹の方式によって盛大な葬儀が行われたのであろうし、そして渡辺家の墓地につづく丘の上に新しく墓地を営み埋葬したことであろう。私は黒衣の神父が十字架を高くかかげて葬列の先頭に立ち、同じく黒衣の信徒たちがこれにつづき、るいざの亡骸（なきがら）を納めた棺は日頃親愛していた近隣の人々がかかえ、母を喪った二人の子供と夫や近親の人々がその後に従い、天帝の恩寵をいのりながら口々にサンタ・マリアをとなえつつ、冬枯の野道をたどったであろうその葬列に思いを馳せるのである。

墓が出来たのはそれから何か月かたった後であろう。何故かならこの墓の様式が異様である、やはり神父の指図によったであろうし、又この石材凝灰岩にしても、この巨きさとなるとちょっとこの近傍では見つからなかったであろう。それほど石の

材質をえらび、施工技術者（石工）もえらんだであろう。

さて見事に出来上った墓石、何しろ大型で重さも大変、とても三人や五人ではどうにもならない。これをどのようにして田舎道を運び、どのようにしてこの丘の上まで運び上げたものであろう。

立派に墓石を据え、十字架を立てて荘厳なミサが行われたであろう。それらの情景がまるで映画でも見ているように私には想えるのである。

（四）墓石の埋匿

「この墓は、渡辺家の当主由忠氏の先代が、大正の初めごろ偶然、土中深く埋まっていたのを発見したが、（測点筆者）この時は異様な墓のたたりを恐れて再び土を覆うてしまったという。ところが昨年（註昭和三十一年）由忠氏が幼時の記憶をたどって或は切支丹墓ではないかと考え、再び発掘して筆者（註半田氏）に連絡してくれたのである。」

と調査書にあるが、土中に埋まってしまっていたということは、極めて重要な意味のあることである。

なぜ埋まっていたか。いや何故土中深く埋めなければならなかったか。それは言うまでもなく、江戸幕府による厳しい切支丹禁制の故である――と私は言いたい。

いつ埋めたものであろうか。私はおおよその見当で、それはこの墓が出来上って間もなく、つまり江戸時代の初期、元和五年以後で下っても次の寛永年間、それも寛永十五年の島原の乱以前と私は推定したい。（従って凡そ三百三十年ばかりここに埋められてあったことになる。）

ご存知のように家康、秀忠による最初の切支丹禁教令の出されたのは慶長十七年、るいざの死んだ元和五年はそれから七年後である。そして翌々年慶長十九年には、高山右近らの切支丹百四十八人がマニラ、マカオに追放されている。元和五年はそれからでも五年後である。切支丹禁教の名実共に既に行われていた元和五年に、よくもまあ大胆にこのような巨大な切支丹墓

がつくれたものである。これについて私は岡藩城下から十里（四十粁）も遠くはなれた、野越え山越え三国峠という大変な峠路を越えての草深い宇目郷、そして当時は僻地の果てであった重岡の故であると考えたい。つまり幕府の禁令も岡藩からの取締りもなか〳〵届かなかったのではあるまいか。それに渡辺家が宇目郷割元役という、宇目代官に次ぐ権勢の家柄であったこと、るいざの切支丹としての信仰あつい生涯を敬慕して、盛大な葬儀をし、類例のない壮麗な墓石を営んだのであろう。切支丹禁制のことはうすうす伝わっていても出来たことであろう。或は又よほどすぐれた神父と数多くの切支丹があって、さながら切支丹の別天地を形づくっていたのでもあろうか。

るいざの墓が出来て程もなく、切支丹は邪宗門としてきめつけられ、信徒に対する厳しい弾圧の沙汰が強く打ち出され、草の根をわけるようにして信徒の根絶をはかることとはなった。これは大変なことである。建設後まだいくらもたたないるいざの墓も、放っては置けない。墓石を何とか始末せねばならないが、それも事は急を要する。なにしろ畳一枚ほどの大きな厚い伏墓である。この墓石を秘匿する最上の方法は、そのまゝ地中に埋めるに如かずとし（或は堀り下げて埋めるという方法も加えたか）その周囲の土を厚く墓石の上に覆い、そこは宇目郷での権力ある渡辺家のこと、村人達の口を堅く封じてひたかくしにかくし、昭和三十一年までるいざの墓は土の中に眠りつづけていたものであろう。

このなぜ埋められていたかについては調査書には勿論「豊後キリシタン遺跡」（半田康夫著）の中にも何らふれていないようである。然し私はおこがましくも以上のような推考をここ数年もちつづけているものである。

（五）墓石の発掘

元和寛永のころからこの墓石発見された昭和三十一年迄は、実に約三百三十数年の年月が流れている。はじめのうちはるいざのこともひそひそと村人たちの話題に上り、又その巨大な墓のこともひそかに村人のさゝやきの中に残っていたであろうが邪宗門切支丹のことゆえいつとはなしにみんなから忘れ去られてしまったようである。

星うつり霜かわり、明治新政の御代とはなった。信教は自由となり、特に西洋文化の背景をなすキリスト教は、むしろ大歓迎される御時勢とはなったが、ここ重岡のるいざの墓はみんなから忘れ去られていたので、明治、大正、昭和と数十年をなおこの丘の上、何天かの土の下に眠りつづけていたのである。

それが日の目を見る機会は偶然にやって来た。「由忠氏の先代が大正の初めごろ偶然、土中深く埋まっていたのを発見」と報告書にあるが、それは由忠が幼童の頃、父親の植林についてこの丘に登り、檜苗の植込み作業をしていた時、偶然その鍬先に当り、掘りまわして見てその大きさと異様さに恐れ、再び土を覆ったという――その記憶から、由忠氏はもしや切支丹墓ではないかと疑い、半田先生に知らせてその発掘調査が行われ、三百数十年前の昔のままのるいざの墓が、その壮麗な姿を現わしたのである。この偶然ということともしやと疑ったことが、私はるいざの墓が発掘出来た二つの鍵であると思う。ともかくもこのようなすぐれたキリシタン史料が、元和五年の昔そのまゝの形で発掘されてあることを喜びたい。再発掘のきっかけとなった二つの鍵、偶然ということともしやと疑った二点を私達は今後も大事に思いたいが、それにしても眼を円くして父親の発掘や埋め戻しの作業を見ていた幼童、その由忠氏が四十何年後になって思い出して疑って考えたこと、再発掘のいきさつがよくうなずけるのである。

(六) るいざの墓の小さな穴

このるいざの墓を訪れたものが、どうかするとその壮麗さに打たれてうっかり見落すものがある。それは表面日輪十字章のすぐ手前に、縦横深さ共七、八糎の殆んどま四角な孔があることである。(写真(六)参照)

第一回にここを訪れた時にすぐ私は気がついて、この孔は一体何だろうと疑ったが、誰かが近くにころがっていた、この孔にピッタリの同じ凝灰岩の切石を見つけた。私は更にさがしたところ草むらの中から同じ位の大きさの、やはり孔にピタリと入るもう一個を見つけた。(写真(五)参照)

写真（六）　孔と二つの石

これは一体何であろう。この孔とこの二つの切石の小片、これについては半田先生も誰もふれていない。磨崖の石仏や石塔にはよくこんな穴が彫られてあるが、それは供養儀式に使っていたようである。それとはちがうようで切支丹墓にそれは要らない。この穴にピタリとはいる二つの石の説明がつかない。

これはあくまで想像である。以下述べるような切支丹墓の類例も知らないが、私は石の十字架をていねいに刻んでこの孔に立てたのだと考えたい。図示すれば上掲のようなもので、それは恐らく上質の凝灰岩をえらび、七、八糎の寸法で慎重に十字架を刻み上げ、図のように立てたものではあるまいか。然し墓石埋匿の日には抜いて上にのせ、一しょに三百余年土の中で、再び発掘した際か、或はその以前に、なにしろ細い石の刻み出しである。破損したのも当然であろう。もしこの私の推測が当っていたら、この墓の周辺の盛り上げた土の中には、長短さまざまな十字架の破片があるはずである。

るいざの墓
（復元図）

二個は写真にある通り見つかっており、ピッタリはまることは写真(四)で御覧の通りである。

この孔と二個の石の小片とは、るいざの墓の様式を明らかにするに必要なもので、心ある人達から次々と小片が発見され、渡辺家にでも寄せていただけると幸いである。尚この推論が誤っていればすぐ取消す心組はもっているので、御教示をお願いしておく。

(七) るいざの墓の保存

るいざの墓は、発見、調査、文化財史跡としての指定と、極めてスピーディーに事は運んだ。私はこのるいざの墓が、豊後キリシタン墓のうちでも極めてユニークな存在であり、しかも当時のキリシタン史に貴重な資料として位置づけられなければならないと考え、単に所有者の渡辺家や地元宇目町に任せきりでなしに、今早急に手を打たなければならないこれが保存、管理の問題にふれたい。

るいざの墓の保存についてはいくつかの問題がある。その第一根本的なものは、三百数十年を殆んど一定の湿気、一定の温度の土中に深く埋められてあって、いわゆる風霜雨露による風化現象から安全に守られていたということである。だから今日私共にこんな美しい姿を見せることが出来たのである。

然し昭和三十一年発掘してから僅か十三、四年しかたっていないが、夜昼の気温、湿度の変化、雨に打たれ陽にさらされ、特に重岡は霜や雪のふかいところ、これは地表に放置されている墓石の大敵である。その表面の眼に見えないほどの小さなひび割れにしみこんだ雨露の水分は、日中気温の上昇と共に膨張して、すぐ指先で突いたほどの欠けをこしらえる。冬分の凍結は更にいけない。放置しておいたら美しいその表面も、あばただらけになる。注意深く見ると僅か十年そこそこであるのに、あちこちいくらでもその痕跡がみつかる。

又前掲どの写真にも見られる通りこけが生えている。このこけはジワジワと水分を味方に滑らかな墓石の表面をおかす。こ

れも馬鹿にならない。周囲の草の処置、排水の問題、せめて水湿からこの墓を安全に守りたい。それには覆屋をつくるとか、定期的に除草剤を用いるとか、まわりに排水溝をつくるとか、打つべき方法、施設がいろ〳〵考えられる。

然しこの墓は県指定の文化財である。勝手に渡辺家や宇目町が手を打つのでなく、一応県の文化財専門委員に見てもらい、一日も早く何とかしてもらいたい。宇目町教育委員会は早急に県教育委員会にお願いして、その保存対策をとりすすめるべきではあるまいか。

（八）観光資源としてよいか

るいざの墓は観光資源ではない。同じ宇目町にある文化財切支丹柄鏡も同様である。

観光資源は観光事業として取りあげられ、且つ経済的なうるおいを地方財政にうけるでなければ成り立つものではない。地方の辺地に、ポツンポツンと単独の観光資源があっても、一般大衆がそれにワンサと押しかけるには交通事情や観光施設や、その外いろ〳〵な条件があろう。特に大衆の興味を引きつける魅力がなくてはならない。遺憾ながらるいざの墓は観光対象にはならないと私は思う。

ではどう考えたらよいだろうか。それは言うまでもなく、日本のキリシタン史の一頁を飾るに足る学術的（宗教史的）な文化財としての価値を思い、どこまでも学術的資料として大事にしたい。

豊後キリシタンの歴史は、その伝道の初期は大友宗麟自らの信奉ということもあって、実に華やかであった。だから豊後各地には到るところに切支丹遺跡や史料文書が残っている。それだけに切支丹禁制以後の陰惨な迫害のこともいろいろな記録や資料が残っている。

るいざの墓はちようどその過渡期に営まれたもので、然も地中深く埋匿されたまゝ完全に保存され、今その美しい姿を見せてくれている。

観光資源として世の俗輩にこの墓がいためられたり、周辺墓地一帯を汚されたりしてはかなわぬ。だから宣伝など控え目にし、学者や学生や、特にキリシタン史に興味をもつもの、或は郷土の文化財を貴重にしらべる人達を対象に、これが調査見学の資料をととのえて提供する、そのような考え方に立つべきである。くり返して言えばこのるいざの墓は、文化財史跡として日本キリシタン史の貴重な資料として、いつまでも今ある美しい姿をそのままあらしめたいものである。

(九) るいざの墓の類例を期待する

最後にこのことを述べたい。るいざが天正慶長前後に切支丹を信奉し、その邪宗門としての禁制に、あわててその墓碑を地下に埋匿したという例が外にもありはしないかということである。

佐伯藩においても初代毛利高政は、もともとキリシタン大名のうちに数えられ、城下には修道院が建ち、又高政自らも目養生と称して鶴見半島方面に出向き、ひそかに礼拝していたという伝承がある。

又ちようど同じころ鶴崎にも臼杵にも、野津にも竹田にもキリシタンは盛んであった。

こうした背景の中で、佐伯地方にも当時かなりの信徒があったであろうし、そしてそれは佐伯に限らず、又豊後だけに限らず、あちこちに散在していたであろうが、さて一旦切支丹は邪宗門として烙印を押され、悲惨な切支丹迫害は多くの殉教者を出しているが、その禁教以前に死没し、立派な墓石の下に葬られた信徒もあちこちあった筈である。それらの墓が切支丹取締にあわてて、るいざの墓のごとく、地下深く埋匿されている例が、外にもあってもよくはないか。そして渡辺由忠氏の先代が、偶然掘り当てたように、そしてこのるいざの墓のように壮麗な、そして十字章はもとよりその霊名、昇天年月日などの記された墓石が発掘されることがあってもよいのではあるまいか。ひそかにそのような期待をもつものである。

(おわり)